

草場亦屈強の足達者なり 屢々松岡に肉迫すれ共
遂に號砲一發吞舟の大魚を逸す、松岡三周半を廻
る

第二十八回 兎競争

一着 森拾三 二着 伊藤至孝

三着 木下八郎右工門

森手足共に長し、而かも体細長くして空氣の抵抗
を受くる最も少し、四足蹴中最も發達せるもの――
――と動物の本に書いてあるかどうか！

第二十九回 綱引

一年級生徒百五十名紅白に分れて輸贏を争う
片や源氏 片や平氏 始め平家方勝を得しが驕る
平家久しからず次回の戦には遂にもろくも源氏の
爲めに敗り盡さる

第三十回 執銃耐忍

最も我慢の入る仕事なり 針金の様な奴にはとて
も勝てず、成績左の如し(番號は早く銃を下せし
ものより)

一番 北川孝道 二分十五秒 一番の弱虫なり

二番 辻 茂三 二分四十五秒ヒョコ／＼と細

長い体に比例して腕も相當に弱しと見ゆ
二番目に兎をぬぎし弱虫なり

三番 徳永徹照 二分五十五秒 目を白黒に
して頭張つて見たれど迎も敵はず 遂に
三番に降参す

四番 押谷秀雄 三分十秒

最早残りしは押谷山田典金森山田の三人
なり誰れか一人下せば勝負はつくなり
「早く下せ／＼」と互に目と目で睨み合ふ
おかしさ 遂に根負けして押谷下す

三分二十秒に至り残り三人尙ほ銃を棒げたり
何れも我慢の人並すぐれて強き者故此の勝負何
時果つへしとも見えず 故に審判官の審査によ
り勝負決す則ち

一等 金森武雄 二等 山田雄吉

三等 山田典城

第卅一回 執銃耐忍

前同に比してはすつと強の者揃ひなり
例の如く我慢のし比べをなす

一番 若林太郎平 三分五秒

二着 西田庄助 三着 加納喜三郎
第卅五回 武裝

一着 北村藤三郎 一分四十秒

二着 豊満 春了 三着 青谷良三

第卅六回 四百米

一着 菅沼 廣次 一分五秒

二着 河村九十九 三着 中居正治

第卅七回 母衣引

一着 草場左喜造 一分五秒

二着 夏原 勘藏 三着 杉立龜之丞

第卅八回 四百米

一着 西村 弘 五十九秒

二着 大平佐一郎 三着 辻 茂三

第卅九回 倒立

一着 上松 憲一 四十九秒

二着 辻 傳二郎 三着 丸本 勇

上松美事に兩難關を通過して第一着を占め辻稍や
後れて入る 丸本北村互に争ひ倒立のやり直し十
數回の後丸本遂に三着となる

第四十回 兎競争

一番に弱りし若林さへ三分をこゆ、この
調子にて行けば勝負は何時の事やら、
二番 小島新二郎 四分
三番 土田清一郎 四分十秒
四番 長尾 慈雲 四分二十五秒

小島四分までこらへしが遂に降参す

土田長尾次でバタ／＼と下す

後には野瀬清水廣瀬杉立の四人なり

何れ劣らぬ強の者 勝負容易につかず

審判官遂に廣瀬を姿勢悪しとて第四等に落し野

瀬清水杉立を夫々一二三と定む 審判官不公平

の聲しきりなり

第卅二回 二百米

一着 中居正治 三十秒

二着 長 良順 三着 芝井匡道

第卅三回 二百米

一着 西川二郎 三十二秒

二着 岡田良一 三着 藤野幸太郎

第卅四回 武裝

一着 片野金三 一分十秒

一着 田畑久三郎 一分九秒

二着 山岡 秀夫 三着 平田誠永

第四十一回 土器割

晝食後最初の競技なり

例年と異なり本年は全滅まで戦ふへしとの事にて各戦士の意氣や大いに上る

一握の後サツと東西に引き分れし紅白の二隊 各々軍を二手に分ち互に敵の大手搦手を抜かんとす堂々の陣 凛々の氣當に赤鬼健兒の意氣を象徴するものありと云ふへし

號砲一發 戦は開かれぬ 山雨將に來らんとして風樓に滿つの概あり 方客は己に決しぬ 進め掛れ 砂塵を蹴つて兩軍の戦士は互に進みぬ

エイッ ヤッ 戦今やたけなはなり 無念の涙を吞んで龍門原上の土となるもの兩軍共に多し

十五分——二十分 紅軍の勢頗る猛烈 白軍漸く辟易の色あり 此の機を失せず鋒先鋭くうち入る紅軍 あわれ白軍の將士算を乱して斃れ勝は遂に紅軍のものとなる

第四十二回 手旗信號

二年級生徒全部 紅白の手旗を手にして一糸乱れず信號す 美しきも勇ましきも!

練習の功や偉大

第四十三回 千米

一周目 成宮五十八秒にて先陣谷口河村此に次ぎて疾走す

二周目 成宮谷口のために抜かれ河村依然三番を守る谷口(一分三十七秒)

三周目 谷口依然先登にあり 成宮河村共に衰へて東野西村の新銳現る(谷口二分五十秒)

四周目 谷口三分二十秒にて先登し東野西村此れを追ひ他は甚だしく後れて勝負の數殆んど決す

五周目 一着 谷口惣次郎 三分五十七秒 二着 東野 亮 三着 西村正雄

第四十四回 二千米

喝采裡に各選手出場 何れも堂々たる体軀と隆々たる筋肉とに溢るゝばかりの覇氣を藏す 甲や乙丙や丁 何れか名譽の月桂冠を得る

一周目 各選手一團となりて走り出し何れを甲乙

頭突に來るハナを右に切掛せば河路こゝろと土俵の砂を握る。

八商 竹若龍三 ○○

本校 音羽啓眞 ○

竹若は見上ぐるばかりの巨漢なり。始め音羽得意の外掛に勝ちしも次に押出され、決勝に於て竹若の押すを劍ヶ峯に堪へつゝ外掛に行かんとするを其儘浴せ倒されて音羽の負

八商 河井 又造

本校 草場左喜造 ○○

愈々大關の取組なり。手取りと地方のある草場始めより勝算歴々たり。立上るや左四ッ草場の内掛極る次に河井の寄り進むを草場打棄れば土俵外に轉んで見苦しき負。

五人抜 四年 久米 健次

五年 草場左喜造

かくして午后三時散會

(夢)

陸上運動大會記録

十月三十一日聖上陛下降誕の佳辰を卜して陸上運動

東軍阪六人を抜けば、西軍顔色なく角田漸く四人を盛り返したるも皆木又もや四人を倒す。既にして西田起つや五人を抜きて漸く愁眉を開く。其後は一勝一敗の形勢に進みしが西軍三露三人を抜きて挫尾の奮闘をなして東軍の御大草場に敗る。草場續く二人を倒して茲に紅白試合を終る。

因に猿橋は伊之坂との取組の際頭部に負傷し、北村は皆木に投げられて肩部に打撃を被りて、決戦に及ばずして土俵を降りり。

對外試合

八商 岩田宗太 ○○

本校 横居祐三

怪物横居も身体數ヶ所の負傷に加ふるに疲れ果てたる後なれば、始より受身にて、岩田の内掛を連發するを能く堪へしも終に吊出さる。

八商 河路尙吉 ○

本校 清水彌三郎 ○○

立上りさま、河路双差一氣に押せば、機先を制せられて清水思はずも土俵を割る。次に清水突き掛け突きかけ土俵外に突き飛ばす。決勝戦に至るや河路の

大會は開かれぬ、時は仲秋の好期なり 而かも近く
擧げさせ給ふ即位御大典の眼前に迫れるあり 健兒
の意氣豈にあがらざるを得んやとでも云ひたげの五
百の若狂者各々健脚によりをかけて質實剛健の校風
を具體的に表現せしむ、天は高く馬は肥わたり
さはれ高きは秋天のみかは、肥ゆるは獨り馬のみか
は、健兒の胸に高き潮する大和男の兒の雄話を聞け
百鍊の鐵にも優る其の筋肉の發達を見よ、赤鬼健兒
の本領は「燈火親しむべき」などと世迷言を並ぶ
る様なるタワケ者とはちがふなり 天帝此れを嘉し
てか今日は朝來の日本晴 絶好又さなき運動會日和
なり 場の裝飾整頓は云はすもがな 新校舍全くな
つてニューグラウンドの土俵開きとも云ふべき今日
の大會

午前八時一同講堂に於て先づ天長節祝賀の式を舉行
し直ちに五年級生徒全部の一齊射撃を以て大會を開
始す、觀衆午後及びて頗る多く殆んど立錫の餘地
なき盛況、實に盛大の大會なりき、

第一回 四百米
一着 村井謙一 一分十二秒

て漸く決勝點に這ひ込む あはれく、
第五回 盲馬

一着 馬場重太郎 三木淇久夫
二着 久德晋一郎 山根令吉
三着 服部 良 西川兵次郎
馬場三木の不具は理想的、前世にもしや……と
誰れかが笑つた。

第六回 六百米
一着 新田承雄 一分五十秒
二着 荒川泰輔 三着 岩田小市郎
新田の疾走振り中々確實、荒川は鼠の如し

第七回 六百米
一着 瀧谷德乘 一分五十二秒
二着 馬場孝藏 三着 伊之坂三州
比較的強の者多きに前回より分數多きは如何

第八回 二人三脚
一着 中村彌平 中村吉次 三十九秒
二着 松本賢藏 岩田幸太郎
三着 小出藤三郎 松本彌一郎
例によつて例の如く倒るゝ者轉ぶ者頗る多し

二着 梅原與惣次 三着 長見貫石
ズドンの一發大會の幕は切つて落されぬ
劈頭第一のランニング村井の勝や天晴れなり

第二回 二百米
一着 秋山 清 三十一秒
二着 安部外雄 三着 阿原忠造

第三回 二百米
一着 森 捨三 三十二秒
二着 西村歡次 三着 吉田 寛

第四回 盲馬
一着 可知猛男 西川庄五郎
二着 花本末吉 小村貞三郎
三着 加納喜三郎 波木居修一

本年新に競技種類に加へられたる新式珍藝、
盲目と跛者（兩足の自由を失ひたる）の沖繫働作
前の盲目が右に行けば後の跛者聲をからして「左
だ左だ……」後の跛者がへたれば前の盲目は
オイノ、早う歩かんかい」とごなりつゝ、ズルズ
ル／＼と引きづり行く、十餘組の不具者 滿ち
走り抜けしはいと少く何れも膝をすりむきなどし

第九回 二人三脚

一着 吉原徳次郎 山田 昇
二着 大久保明文 藤田猶太郎
三着 白 髭 英露 下川鶴太郎

第十回 重荷
一着 横井祐三 三十三秒
二着 夏原勘三 三着 松原正義

第十一回 重荷
一着 西田庄助 三十五秒
二着 久米建次 三着 木村 馨

第十二回 四百米
一着 宮内精一 一分十二秒
二着 遠藤捨三 三着 西島德造

第十三回 千米
本日屈指の呼物たり 出場者は何れも腕に覺わの
ある猛者ばかり、號砲一發早や各選手は半周を走
りぬ

第一周
清水（三十三秒）中村松岡雁行して走り他之れ
に續く

第二周

清水尚は先頭にあり(一分十秒)松岡中村を抜きて清水に迫る中村漸く衰ふ

第三周

清水(二分五十秒)松岡猛烈に戦ひつゝ走る坂東猛烈後より起りて中村を抜き、走者漸く減少

第四周

清水(三分三十秒)松岡坂東の順松岡坂東の間少しく間あり若林大久保後より坂東ををびやかす、走者は此の五名のみ

第五周 清水三分五十五秒を以て決勝點を突破し次いで松岡二着を得、坂東漸く衰勢あり若林ラストヘビー頗る猛烈、遂に坂東を抜き、三着となる、好漢坂東大久保自重せよ、

第十四回 一人一脚

一着 熊澤幸一郎 四十三秒

二着 平田 誠永 三着 蒲山一雄

熊澤スタイル頗る見事 群を抜きて決勝線に

第十五回 一人一脚

と定めかたし 松原(三十三秒)松岡服部の順

二周目 松岡奮然松原を抜き馬場勇躍服部を越す時に一分十秒

三周目 松岡一分五十五秒にて先登、馬場此れに次ぐ此の時清水漸く得意の疾走もて馬場に肉迫し松原衰へて清水に抜かる

四周目 清水更に奮進馬場を抜き松岡に迫り兩虎今や戦はんとす時に二分四十秒

五周目 松岡如何せしか急に衰へ清水馬場に抜かれて三位となる 五人目位にありし松原急に疾驅して前三者をぬき第一位を占む(三分二十七秒)

六周目 松原四分十五秒にて先登、清水悠々此れを追ひ三木馬場を凌ぎて三番に現る

七周目 松原五分にて先登、清水次位にある例の如し 松岡猛然勢力を挽回し來り三木をぬきて三位を奪ふ

八周目 清水漸く實力を現し來り松原を抜く事數間五分四十五秒にて先登す 松原之れに

一着 古川左一 四十五秒

二着 平川開次 三着 岩木義勇

第十六回 二人三脚

一着 丸橋茂信 片岡和夫 三十六秒

二着 小川桂端 坂安彦

三着 松濤敬之 宮戸龍憲

丸橋片岡の一寸組、小さいコムパスをうまく合せて勝を占む よく走るよりも呼吸の合ふが肝要なりと覺ゆ チョコ／＼と他の時の下腹の下などぐさり抜けてかけ行く二人の姿やなか／＼にあざやかなり

第十七回 二人三脚

一着 田中徳之助 松浦平太郎 三十五秒

二着 中居 謙次 中村久五郎

三着 中村太四郎 豊満 春了

第十八回 一分間

一着 東 全治 二着 大鳥居武彦

三着 宮本東三

東大鳥居烈しく争ふ 寸尺の差なり 東四百米少しく足らざる所まで走る

續き松岡更に其の後に迫る

九周目 清水(六分三十七秒)松岡相次いで走り松原衰へて三木にぬかる

十周目 愈々決勝の時は來りぬ 各ラストヘビーを出して疾走又疾走

一着 清水彌三郎 七分十四秒

二着 松岡源之真 七分二十秒

三着 松原 政義 七分廿二秒

四着 三木淇久夫

五着 若林太郎平

第四十五回 四百米

一着 門根秀次郎 一分三秒

二着 北川 源平 三着 中村基一

第四十六回 角力

例年大好評を博する角力なり、本年も不相繼各力士の元氣頗る猛烈、應援亦盛なり

三本勝負(○ハ勝×ハ分)

東方

力 石 (力石彌太郎)○

荒神嵐 (岡田 良一)○○

言ふだけはいふ(棕田眞次郎)〇〇

ひむれ山 (田中 常吉)〇

玄關番 (水原 完)〇〇

ベケレツバー(北川源平)〇〇

ボリスマン(若林太良平)〇

七面山 (藤本弘治郎)××〇

出雲の神さん(松原政義)〇

アサツテ (土田清一郎)〇×

與一兵衛 (草場左喜造)〇

西方

八千代足袋(富田 捨三)〇〇

生意氣 (林 半四郎)

矢口の渡 (森田 承雄)

十 五 (松居 彌七)〇〇

千成瓢箪 (木下八郎右工門)

八犬傳 (瀧澤 信夫)

來てもらふ(中村一太郎)〇〇

住井富士 (住井富士雄)××

尾張名古屋(杉立龜之丞)〇〇

馬耳東風 (木村 馨)〇×〇

エベレスト(清水彌三郎)

三本勝負終りて次で五人抜に移る

入り交り立ち代り後よりくど敵の懐にとび込み

つゝ火花を發して相戦ふ、壯絶快絶、

三年以下五人抜

三年以上五人抜



第四十七回 障害物

一着 西川庄五郎

二着 西村 正雄

第四十八回 障害物

一着 野瀬 房雄

一分四十五秒

三着 大鳥居武彦

一分三十八秒

二着 横居 祐三 三着 馬場重太郎

第四十九回 小學生徒四百米

一着 小森 二着 小市 三着 兒玉

四着 山本 五着 關

第五十回 小學生徒二百米

一着 安藤 二着 宮田 三着 谷澤

四着 近藤 五着 村下

第五十一回 幅跳競走

レコード左の如し

一等 澤 憲太郎 二間二尺三寸

中居 謙治 二間八寸

二等 菅沼 廣次 二間二尺

三等 梶 益三 二間一尺五寸

丸本 勇 二間一尺

瀧澤 信夫 二間一尺

第五十二回 幅跳競走

一等 末松 秀雄 二間三尺

二等 野瀬 房雄 二間二尺八寸

廣瀬 蓮麿 二間一尺二寸

小村貞三郎 二間一尺八寸

三等 谷田惣次郎 二間二尺

小島新次郎 二間一尺七寸

渡邊 勝己 二間

久米 建次 二間一尺

古川源五郎 二間

三越幾太郎 二間

藤村小次郎 二間一尺

第五十三回 二百米

一着 加藤 亮三 三十秒

二着 松浦平太郎 三着 水原 完

第五十四回 二百米

一着 久徳晋一郎 二十九秒

二着 山本 三郎 三着 馬場重太郎

第五十五回 來賓六百米

一着 澤田 一分四十三秒

二着 北村 三着 花木

第五十六回 優勝者千米

四百米以上の競走にて各一着を得し本は優勝者の

みよりなれる競走なり、月桂冠はやはり清水に歸

す



雜報

御大典奉賀式

大正四年十一月六日、天皇實所を奉じて西に幸せられ其十日平安の舊都に登極の大典を擧げさせ給ふ。抑々尊嚴坤輿に匹儔なき我が皇室、金甌無敵の確保遠く有史以前に在て存す。明治維新の大業成就してより旭日昇天の勢を以て國運の隆盛、千古に比なし允武允文なる我皇、夙に德政を布かれ常に我々蒼生を綏撫し給ひ、皇威四海に普く、宇内咸其德を仰ぐ、是れ豈に堯舜の德に加ふるに肉湯の仁を以てするに非ずや、看よ、芙蓉は千古の雪を戴き、鴛の湖は四時漣を湛ゆるを、千班の鶴鷄肅々として賀を捧げ、萬國の衣冠翼々として慶を獻す、洵に是れ國家の大禮葬教の淵源なり、

嗚呼、吾人何の幸ぞ此の盛典の餘慶に浴するを得むとは、時正に晩秋、菊花雖に紅を紅ひ、楓葉滿山

清水始めより優勢なりき菅沼松岡等時に此れに及ばんとせしが遂に長蛇を逸す

一着 清水彌三郎 三分十二秒

二着 谷口惣次郎 三分十七秒

三着 松岡源之真 三分二十三秒

第五十七回 職員綱引

エイヤ／＼の掛聲勇まし 應援最も盛

第五十八回 合同体操

一、二三年全体の合同体操なり 氣よく合して一糸

乱れず

第五十九回 綱引

第六十回 中隊教練

四、五年生徒百余名の中隊教練なり

例年にまさりて成績よし一齊射撃殊に見事

終りて分列式あり 校長の訓辭ありて天皇陛下の

萬歳を三唱し散會す

時に午後五時、夕陽當に西山に沒せんとして光芒

長く古城の白壁に掩映せり

星岡記



を錦に蔽ふ、於是乎本校は十日午后講堂に參集、嚴肅に着席す殊に本日の式場は一入緊張したる感あり校長やがて壇上に現はれ式辭を述べ次に御大禮に關する訓話あり終て靜肅の裡に午后三時三十分を待つ最早餘す所僅に一分となりし時、恰も水を打ちたるが如き靜肅にて咳一つする者もなし、

時に!!時に!!工場の汽笛と共に、校長の誠心誠意を罩め莊重謹嚴なる語調を以て 陛下の萬歳を三唱せられ、一同交互に相和す。

聲は伊吹の峯も揺かんばかり、芹川の流れも堰き止むるばかりにして餘音遠く城山の杜に反響す、實に本日の舉式の莊嚴筆舌に盡くし難し、式終り直に樂隊先頭に日の丸の旗を金風に翻へし蜿蜒數町に渡れる本校の隊伍の整頓、行進歩調一入牙

ねて、凜々しくして堂々たり。

旗の町!祝賀の聲!歡呼の響!五彩陸離、奉祝歌は勇壯に天も破れど赤誠を込めたる本校の大部隊は、市街を流れ流れて、光輝燦爛たる黄昏の暮、落ちんとする正に六時過一同歸校、

校長先生の發聲に和し、新校舎も撼かむばかり、萬

歳を三唱し、歡呼場裡にいとも目出度く解散したり誠に今日を言祝ぐ欣喜の熱誠は玉樓と蓬蒿と貴人と野人の差なく津々浦々に至るまで壽ぎ奉るなり、而して御大典記念として校庭に植樹の企てあり、此れに櫻を以てす、櫻は昔「花は櫻木、人は武士」の譬の如く、精神の潔白玲瓏たる秋の月の如く御大典を記念するに最も相應はしき好木なり、

吾人天恩を拜し萬歳を叫び、實祚の無窮を祈るに共此の櫻の千古萬古永久に枝繁く彌榮に榮えん事を神かけて祈る者なり、「典の櫻」とも名づけ得べきか。

吁感は長く筆は短し、萬歳! (芝井記) 四、一二、五

大禮式場拜觀旅行記

十二月三日 この日こそ我等全校生徒にとりて最も印象深き日なり、恐らくは終世この日を忘るゝの事なからん、即ち十二月三日は我等は一生に又遇ひ難き千載一遇の國家最大の御儀式たる即位の御大禮を行はせられたる式場を拜觀せしの日なり、さればた

とひその日、その時は忘るるもこの光榮に浴せるうれしき事は忘るまじ今その大畧を記して記念とせん
四百九十餘名の全校生徒は梅田先生初め諸先生引率の許に午前六時三十分彦根驛を出發したり本日校長は全國中學校長會議御出席の爲め東上中にて一行を統率遊ばされざりき、午前八時過ぎ一同は京都に無事到着せり先づ五年級を先頭に隊伍を整へ烏丸の電車通りを御所へと向へり、半時間餘にして漸く御所の入口に至れり、見れば既に數千の拜觀者堵列せりこれ等の人々はいづれも御所へ入着順に二列となりて幾回か迂回して大輪を書き而して先づ第一に紫宸殿を拜するなり、我等大部隊の団体も各個人と同様の歩みを運びたり。かくて約二時間を費して漸く紫宸殿に入ることを得たり、入口にて守衛の警羅の注意にて先づ脱帽し御式日當時そのまゝのいと莊嚴なる御式場に臨みたり、本殿の南榮に日像の繡帽額を懸け母屋の中央南面の三層繼壇を立て高御座安置せられ其の東方に皇后の御座を設けられその儀三層繼壇を立て御帳臺を安かれたり、階前の東西には緑こ

まやかにしかも實をも結べる右近の橋年をへし清潔なる左近の櫻靜寂の裡に立ちたり、聞く南庭の櫻は往時は梅なりしも仁德天皇の比、櫻に代へられしものにて今のこれは安政二年凝華洞に在りしを移植せられしにて右近の橋は延暦遷都の時橋本大夫の宅に在りしを移し栽へられ今あるは安政の二、北小路差次藏人の亭の橋なりしと、さてこれより稍距りたる階下白砂上に數旒の赤白様々なる菊御紋章入りの美麗なる旌旗兩側に立ち並び續いて艶麗極りなき諸樂器置かれたり、いとも莊嚴の極みなり、四方に眼をやれば紫宸殿に連れる各廻廊には所々に門あり、正門は即ち建禮門にして或は月華門或は建春門と名記せる立札ありたり而してその廻廊には簷を敷かれたり、建禮門は樺木造りにて檜葺なり車駕行幸還幸の時に限りこの門は開かるゝなり、この門の年へて何等裝飾をほごされざるは本殿の階段の古びて昔ながらのそれと相俟つて一入と嚴かに神々しさ云はん方なく覺えず頭へ垂れたり、かの廻廊は式當日には參列諸官の席にあてさせられたりとか承る、あゝかゝる崇き場所に束帶の高位高官の文武官列席をし主

上高御座に出御ましまし總理大臣南階に登り南榮の下に於て壽詞を奏し定め位置たる萬歲旛の前面に參進し萬歲三唱申し上げし時の様や如何に我等は今たゞこれを想像するに過ぎずと雖もこの拜觀の光榮に浴せるは齊しく喜んで忘れんとして忘る能はざるものなり拜し終れば月華門を出で、仙洞御所内の東西に棟を並べる悠紀殿主基殿を拜觀申し上げたり、外廊は繞らすに柴垣を以てし本殿は黒木造にして茅葺とす、その様子は全く昔のまゝにて實に御質素なる建物なりき、それより賢所春興殿を拜せしが前面には御拜所並びに文武百官の候所に充つべき各八十一坪の大櫛舎を左右に設け外に御羽車舎御手水舎神饌殿皇族詰所内掌典等の各舎別に後方に設けられ周圍に板塀を廻し別に一廊をなすこの殿の建築はその様式は大社式其他とは全然異り御屋根は反妻にて銅板葺なり御用材は總檜木にてこは悉く木曾御料林産なりと、これにて御所拜觀を終り二條離宮に向ひたり、離宮は御即位の禮に次いで大饗を賜ひ又豐樂殿を設置せらるゝ所にしてそのかみ徳川家康の創立にかかり華麗を究極して造りしものなり、入りて拜す

るに東北隅に悠紀地方風俗歌の屏風西北隅に主基地方風俗歌の屏風を立てさせられ母屋の四面に壁代を代り之を塞げ其の中央に天皇の御座東方に皇后の御座あり又各御椅子並びに御臺盤を立つ南東西三廂の周圍に青簾を懸けその内に諸員陪宴の第一座を設け南庭の中央に舞臺を構へ其の東南隅に樂官の櫛を設けられたり天井はと見ればその美麗なる筆紙に陳ぶ能はず且つ晝間も電燈燦として四方金銀をちりばめたる裝飾に映じその美しさ言はん方なし、この間に舞姫の五節の舞行はれ諸樂奏し、諸員白酒黒酒の賜饌を受け君萬歲を壽ぐに至つては實にや絶世の壯觀なりしならん、午後一時過ぎ此處を出で附近の市教育會の設置にかゝる食事場に至り一同晝食を喫したり、食終りて三條大橋を中心として五、六旅館に全校生徒は分宿したり、即ち一年級は大正館二年級は若狹館に三年級は某館に四年級は豊後館に五年級は富士館支店にと定められ富士館支店を本部とせられたり、午後四時より一行自由解散を許され京極の灯、圓山の夜景にと皆思ひ／＼に見物なしたり、かくて楽しき拜觀旅行の第一日の幕は閉ぢられたり

四日、午前八時に五年級の一行先づ東山を望みつゝ、今日の目的地博覽會場前に達したり、先着の三年級の各組は待ちあぐみたる顔を我々にむけ居たり、開館は毎日午前九時なりければ入るには未だ早し、どうかする中に一二年も来る、最後に四年級は殿といふ格にて後れ走せに走せ参んじたり、之れにて全員悉く集合したるなり、定刻になりて先づ門前右側のクラブ商舖の廣告飛行機納庫を右に目撃して入場したるが各自隨意に見物せり這入れば右手が工業館左手が食料館参考館演技館臺灣館等なるが多く人の足を向くる順序はやはり左手の方よりの如く見受けられたれば我もその中に難りたり、狭くるしき所にこゝして難然と而かも何色といふか至極俗惡な色にて塗り立てたる恰好の奇な建築物はズバリ前に並びたる姿は又妙なりき、我等の第一會場を見物すべき時間は一時間と限定せられたれば我々は足をも駐めずして素通りに眺め行きぬ、食料館はこれといつて珍らしき物も見受けず唯各種の野菜果實等が殊によく實のりゐたると京都の名物なる立派な美味な菓子を見て下級の人々爲めに垂涎一斗暫しは立ち去りかね

たる事とのみ注意を惹きたり、演技館は午後よりの開演にてもあれば勿論のぞくべくもなかりしが次の臺灣館は外見は臺灣特有の建築にして内の陳列品の貧弱なるには一驚したり、即ちもつと臺灣館に於ては参考すべきものは多からんと外廓を望みて思はしめたる我々の期待に反したるなり、工業館は例によりて例の如く主として京都及び大阪邊の出品物もて埋められありたるがそれにて大興紀念といへるだけありて一段と注意の拂はれたる跡歴然たりされど陳列品は從來のとは大同小異にして裝飾に於ても新に機軸を出すものとは之れなく所謂千編一律なり、暫時場内の一隅に立ちて觀覽人の陳列品に對する態度如何にと見居たりしがサツサと素通りするもの多く四筋とも凡帳面に見物し行けるもの殆んど稀の姿なりき、これにては當事者は泣き居る事ならん参考館第一第二ともに内容實に平凡なものにて十分も要すれば兩館とも一瞥を與へ得らるゝものなるが但し煙草專賣局の煙草製造の實況の出品のみは可なりな人目を惹きゐたり、こは日頃一般人士が機械の智識に乏しき爲めかゝる運轉せる機械の巧妙に思

由解散を許され午後四時五十七分の列車にて何等失態なく無事歸彦したり。

櫻居先生を送る

明治三十九年以降本校歴史科に教鞭をとられし吾が敬愛する櫻居先生突如本校を去りて南海の地に轉せらる生等哀別の念に不堪 只々涕泣先生が御健康を祈るのみ

水島先生を送る

任を明治四十四年六月本校にうけ給ひてより五閱年慈愛の心を以て生等を教導し給ひし水島先生今俄かに此の校を去り給ふ あはれ去らるゝ事の何ぞ早き離苦の思永へに消ねず 希くば湖畔の月を忘れ給はざらん事を

四先生を迎ふ

先きに櫻居水島兩先生を失ひし我等は間もなく學徳共に秀でし村上白田大植青木四先生を迎ふるの喜に會しぬ先生 其の學殖と其の德行とを以て希くば生等か蒙を啓き給へ 新進の四先生を迎へて欣喜の至りに不堪 恭しく粗辭を呈す

はず目を止むるにて或は工業發達の國より見れば全く一奇現象と思はるゝやも知れざるがその機械の間の白衣の乙女の好妙なる指頭の働きを望みなば、こつ國人も我國人の手工に巧みなるに驚嘆せん、臺灣館を出づれば右には酒麥酒其他種々の廣告塔や休息所處狭きまで建ち並びたりこは些か本會場そのものゝ趣旨に戻りあるには非ざるやの感を深くせり、滿州館こゝとてもその構造塗方の滿州其儘といふにすぎざるのみが人々には僅かに目新しく思はれしのみにて中味の貧弱なる之れ又語るに足らざりき、これにて第一會場は全部見通したるなれば次は第二會場に入りたり、此處は各種の賣店興行物等櫛比なし博覽會の目的の奈邊にあるやを疑ひたくもなりたりされば特に記するなし、一時間餘にてこの會場を去り第三會場に向ひたりこは博物館が之れに當てられたるなり、入場すれば多くは古代の書畫彫刻類のみ陳列せられカビ臭き匂ひ場に滿ち滿てり是等に趣味も興味も有せぬ我々は冷淡に一瞥を與へて出場せり但し現代の日本書西洋畫の陳列場は些か人の足を止めたり、それより愈々七條驛に至り約一時間餘の自

澤田君誄辭

乾坤一轉して、潑刺たる新年を迎へてより僅かに二旬、誰かは知らん無常の風吹き荒んで吾人が畏友を奪はんとは。

あゝ澤田君逝けり。將來爲す有らんとせし秀才は春花の開をも待たで散りぬ、雪姫のかへりの行幸をも送らで去りぬ。

君蒲柳の質を以て、克く勉め、殊に其の俊秀なる頭腦にいたりては誰か他日の偉業を鶴首して待たざりしものあらんや。しかも吾人は遂に君を未來に見ずなりぬ。我等がなげきたとへば明日咲かんとする蕾の一夜がうちにまたゝくなりしが如し。をしみてもゝは餘りあらんや。あゝ悲しい哉。

君の父君、湖北長濱に眼醫を業とせられ、君はすなはち其の長子なり。父君の君が成業を待ち給ふこと切なるを覺ゆ。しかも一朝君既になし。老父母君一幼弟を懷いて徒に悲嘆に暮れ給ふ。天を恨むも既に益なし。地に哭するも及ばず。

されど君、天命と知れ。我等一同たゞ先後を争ふの

み。やがて又君がほどりに行くべきなり。天をな恨み。庶幾くば饗けよ。

大正五年一月二十七日

雜誌部理事一同

學校日誌摘要

十月二日 午前第十一時より職員生徒一同彦根招魂

社合祀祭典舉行に付き參拜

十月四日 午前第八時三十分より大洞内湖に於て祝

勝端艇大會を開催

十月八日 午前第八時十分より講堂に於て行啓紀

念式を舉行し續いて武術大會を開催す

十月十九日 第四年生生徒叡山へ第三年生生徒は賤

ヶ岳へ第二年生生徒は安土へ第一学年生

徒は西明寺へ一日旅行を行ふ

十月二十日 第五時限井伊直弼朝臣誕辰百年祭執行

につき參拜

十月二十八日 午前七時五十分彦根驛發の汽車にて

學校長木川書記を隨へ滋賀縣廳へ出張

御影奉戴午後一時三分着直ちに講堂に於て奉戴式を舉行す

十月三十一日 本日午前七時二十分集合

午前七時三十分より講堂に於て天長節祝

日拜賀式を舉行續て陸上運動大會開催

午後四時前無事閉會

十一月五日 白田教諭の對面式を行ふ

十一月七日 天皇陛下御通暈につき學校長は米原驛

に於て奉送迎をなす、職員生徒一同は彦

根驛に於て奉送迎をなす

十一月八日 午後零時四十五分より職員生徒一同彦

根驛に至り 東宮殿下京都へ行啓につき

奉送迎をなす

十二月十日 午後一時五十分集合

午後二時二十分より講堂に於て御大禮儀

式を舉行し續いて旗行列を行ひ午後五時

五十分歸校の上解散

十一月十二日 午前九時 東宮殿下御還啓につき當

驛に於て奉送迎をなす

十一月十三日 午前八時より角力大會開催

十一月十四日 午前八時より官幣大社多賀神社に參

拜 午後第二時より第八高等學校蘭交會員

鹿苑慈教外五氏の演說會開催薄暮閉會

十一月十五日 午後零時四十五分より職員生徒一同

縣社佐和山神社へ參拜

十一月十六日 大饗第一日の儀を行はせらるゝに付

き休業學校長教諭地方賜饌に參列

十一月二十七日 天皇陛下御還幸につき午前十一時

より彦根驛に於て奉送迎をなす、學校長

は米原驛に於て奉送迎せらる

十二月三日 職員生徒一同御所拜觀博覽會觀覽のた

め京都市へ出張

十二月十八日 午後零時二十分より終業式舉行

一月一日 新年拜賀式舉行

一月八日 始業式舉行

一月十五日 兎狩を行ふ 獲五兎

二月五日 發火演習を行ふ

二月十一日 紀元節祝賀式舉行 式後武術大會を行

ふ

二月十二日 本誌編輯終了

寄贈雜誌

明倫 二六 名古屋私立明倫中學校
 廉城 三七 大垣中學校々友會
 學友會誌 一八 京都府立第二中學校
 校友會報 三、三 長濱農學校々友會
 校友會雜誌 三二 京北中學校々友會
 早稻田學報 二四、二五 早稻田大學校友會
 學友會報 自七至六 神戸高等商業學校
 知道月報 自七至六 水戸中學校知道會
 校友會雜誌 五三 三重縣第一中學校
 七 生 二六 杵築中學校七生會
 會 志 二九 廣島高等師範附屬中學校友會
 矯々會雜誌 一〇七 福岡縣立中學明善校
 北辰會雜誌 七四 第四高等學校北辰會
 近江商人 七二 八幡商業學校
 學 林 八〇 愛知縣立第一中學校
 渦の音 二七 德島縣立德島中學校
 奉 公 一六 滋賀縣師範學校奉公團
 文武會誌 一五 奈良縣立畝傍中學校

至 誠(大禮記念號) 大坂府立八尾中學校
 玉 藻 記念號 香川縣高松中學校
 羽 城 四五 秋田縣立秋田中學校

編輯餘滴

○校庭の淡雪消れて梅花數輪早くも花信を傳ふる頃
 生等漸く本號の編輯を終へ申し候
 ○筆を投じて意外に目をやれば淡紅の春の光り木々
 の若葉に陽炎ひて春眠實にや心ゆくばかり長閑な
 るもの御座候
 ○顧へば生等非才の身をも顧みず任を雜誌編輯の事
 に受けしより一年の月日こゝに過ぎ將に秃筆を投
 じて壇を下らんと致し居り候
 ○あはれ多事なりし哉此の一年の月日や取り分け五
 月の新築落成式十一月の御即位式は實に吾人の紀
 念すべく記憶すべき事件にて候ひき、此の多事な
 りし一年をさせる大過なくして過し得たるは實に
 諸兄が熱誠なる後援と贊助とによらずんばあらざ
 る所と此に一筆を録して感謝の微意を表し候
 ○本年ばかり會員諸君に不幸なりし年は又なく候と

存じ候、舊臘長谷川山川兩君を喪ひて哀痛の思ひ
 未だ遣らざるに新春早々更に澤田君の永眠に遇ひ
 て候ひき、悲しみの至りには候はずや 深く弔意
 を表するものに御座候

○講演欄は僅に村上教諭の滿鮮紀行談を有するのみ
 而かもそは亡澤田君の筆に候 出色の才を抱いて
 冥界の鬼となれる亡君の不幸此の遺稿を手にして
 は坐る涙の下るを覺え申し候

○文苑欄馬場君の行脚日記は前々號の分なりしも紙
 數の都合により本號に繰り入れ候、何卒左様御領
 承願ひ度

○詩藻欄の微々たるは如何のものに候や、敢て若き
 歌人の奮起を待ち居り候

○通信欄は遺憾ながら本號を飾るを得ず衷心先輩諸
 兄の御通信を鶴首いたし居り候、在校中本誌に快
 筆を振はれし諸兄御卒業後杳として消息を聞かざ
 るは如何、願くは一枝の筆の花の香りを寄せられ
 ん事を

○各部報も頗る賑やかに殊に水上部の大功名を報じ
 得たるは最も欣幸とする所に御座候、

只野球部のみ姿を見せざるは遺憾
 ○吾等編輯員の一部は此三月を以て母校を永久に去
 るべき運命を有ち居り候、健在なれや諸君、第二
 の國民として近く國家の大任を負ふべき吾人心す
 べきは青年時代の修養にこそ、さらば、
 ○編輯を終ふるにあたり先づは右迄

雜誌部理事一同



寄贈雜誌

至
誠(大禮記念號)
大坂府立八尾中學校

明治廿七年五月三十日內務省認可
大正五年三月三十一日印刷
大正五年四月廿七日發行
非賣品

發行所

滋賀縣立
彦根中學校
校友會

滋賀縣立彦根中學校內

編輯兼
發行人

市毛雪

印刷人

滋賀縣犬上郡彦根町大字五番
村下斯康

印刷所

滋賀縣犬上郡彦根町大字五番
村下活版所